

山形県における啓翁桜産地の生産流通構造と産地振興への取り組み——JAみちのく村山の例、山形県啓翁桜品評会と各種キャンペーンの例——

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 酒井, 宣昭, 浜西, 駿輔 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000203

山形県における啓翁桜産地の生産流通構造と 産地振興への取り組み

——JAみちのく村山の例、山形県啓翁桜品評会と各種キャンペーンの例——

酒井 宣昭・浜西 駿輔

I. はじめに

啓翁桜（ケイオウザクラ）は、主に各産地で切り枝花木として商品用に栽培を行っている品種である。この啓翁桜は秋から冬にかけて休眠している状態の桜の枝を切り、その切り枝を促成室に入れて加温し、開花時期を早めて12月中旬～3月下旬に出荷する（酒井・浜西2019）。

啓翁桜の産地には、徳島県上勝町、富山県富山市山田地区、長野県飯田市松川町、埼玉県、福島県塙町片貝地区、山形県、秋田県鹿角市や小坂町、青森県弘前市や西目屋村がある（酒井・浜西2019）。この他に明らかとなった啓翁桜の産地には、奈良県五條市西吉野町川岸地区（五條市観光協会2023. 3. 20、五條市観光協会2023. 3. 24）^{▼1}、福井県大野市矢地区（中日新聞2021. 2. 4、中日新聞2022. 2. 12、中日新聞2023. 2. 17）、富山県南砺市小又地区（中日新聞2021. 2. 2、北日本新聞2023. 1. 6）、長野県大桑村（中日新聞2021. 2. 10、中日新聞2021. 2. 20）、群馬県中之条町五反田地区（上毛新聞2021. 2. 14）、花巻市太田地区（岩手日日新聞2020. 3. 10）がある。

啓翁桜は春になるとソメイヨシノ、シダレザクラ、ヤエザクラ、ヤマザクラなどの品種と同様に自然に開花する。ただし、商品用に栽培を行っている啓翁桜の産地では、自然に開花した状態の啓翁桜を切り枝花木として出荷しない（酒井・浜西2022）。一方、酒井・浜西（2022）では、鑑賞用に植樹している啓翁桜の名所として長崎市鳴滝の七面山妙光寺（しちめんさんみょうこうじ）と東京都新宿区内藤町の新宿御苑（しんじゅくぎょえん）があることを紹介し

た。この2か所以外の啓翁桜の名所には長崎市文教町の文教公園、山口県宇部市の「ときわ公園」、京都市中京区の二条城、埼玉県朝霞市の黒目川堤防の泉橋付近がある。

2023年3月10日のNCC長崎文化放送によると、長崎市の文教公園の浦上川沿いには高さ6m～7mの10本の啓翁桜があり、3月10日時点では満開との報道であった。この啓翁桜は長崎市扇町に居住する当時60歳のK氏ご夫婦が自宅の仏壇に供えるために生花店で購入した約30cmの切り枝を長崎市に寄贈し文教公園への植樹を願い出たものである。文教公園には東日本大震災が発生した2011年3月11日の昼過ぎから14：40頃に市の職員が植樹を行った。文教公園は、長崎原爆の爆心地から約1.5km、1982年の長崎大水害で被災した川平町から約1.5kmと近く、啓翁桜の植樹は原爆と水害の多くの犠牲者を鎮魂する意味も込めている。K氏ご夫婦は文教公園の近くに居住しているため、植樹後の約1か月は朝晩に水やりや除草作業を行ってきた。文教公園の他、K氏ご夫婦は長崎市内の原爆落下中心地公園（爆心地公園）、山里小学校、高尾小学校、山里地区ふれあいセンター、純心聖母会にも啓翁桜の苗木を寄贈している。

ときわ公園は、1925（大正14）年に宇部市が常盤湖を中心に広がる面積約100haの都市公園として開園した。ときわ公園には、「ときわミュージアム（緑と花と彫刻の博物館）」、「ときわ動物園」、「ときわ遊園地」、「石炭記念館」、「ときわ湖水ホール」、「ときわレストハウス」、「ときわ湖畔北キャンプ場」がある。また、ときわ公園内にはサクラ、ショウブ、スイレン、ボタン、シャクナゲ、フジ、ヒラドツツジ、アジサイ、ウメなどが植樹されている。サクラは

ときわ公園内に約3,500本があり、桜の名所の1つとなっている。うち啓翁桜はときわミュージアム（緑と花と彫刻の博物館）の近くに3本があり、3月中旬にはピンク色の啓翁桜が開花する。「ときわミュージアムブログ」では、2023年3月11日に「啓翁桜とアーモンドの花」のタイトルで咲き始めの啓翁桜を撮影した3枚の写真とともに投稿があった。また、2023年3月17日には「啓翁桜とアーモンドの花②」のタイトルで満開の啓翁桜を撮影した2枚の写真とともに投稿があった。

京都市の二条城には約300本のサクラの木があり、3月中旬から4月下旬にかけてはサクラの名所の1つとなっている。二条城のWebサイトには「桜の開花状況」のページがあり、ここではカンヒザクラ、ケイオウザクラ、シダレザクラ（一重）、ソメイヨシノ、ヤマザクラ、シダレザクラ（八重）、サトザクラの主な植栽場所の図と日毎の開花状況を把握することができる。啓翁桜は、主な植栽場所の図によると二条城の清流園南側に6本がある。

埼玉県朝霞市には、黒目川の泉橋付近の堤防に3本の啓翁桜がある。この啓翁桜は朝霞市と災害相互援助協定を結んでいる山形県東根市より寄贈を受けて植樹したものである。朝霞市のWebサイトには、2023年3月20日（月）に「啓翁桜（けいおうざくら）が満開を迎えています」のタイトルで満開の啓翁桜を撮影した2枚の写真とともに投稿があった。

本研究の目的は、啓翁桜の一大産地である山形県を例に取り上げて啓翁桜産地の生産流通構造について明らかにすることである。山形県内のJAの中で生産者数が2戸以上であるのは、各JAや各生産者への聞き取り調査によると、以下に①～⑦で示した7つのJAである▼²。酒井・浜西（2019）は①JAやまがたと②JAさくらんぼひがしねにおける啓翁桜産地の生産流通構造を明らかにした。また、酒井・浜西（2020）は③JA山形おきたまと④JAてんどうにおける啓翁桜産地の生産流通構造を明らかにした。さらに、酒井・浜西（2022）は⑤JAさがえ西村山と⑥JA庄内みどりにおける啓翁桜産地の生

産流通構造を明らかにした。本稿は、酒井・浜西（2019、2020、2022）に続き⑦JAみちのく村山（管轄地域：村山市、尾花沢市、大石田町）の啓翁桜産地の生産流通構造を明らかにする。また、山形県の啓翁桜産地では産地振興のために山形県啓翁桜品評会や各種キャンペーン、事業が行われている。本稿ではその内容についても明らかにする。

本稿の構成は、I章では啓翁桜の概要と本研究の目的について明らかにする。II章ではJAみちのく村山における啓翁桜産地の生産流通構造を明らかにする。II章では、1. 栽培の始まり、2. 生産者数の推移、3. 樹園地と作付面積、4. 集出荷を行う作業室を併設した促成室の整備状況、5. JAからの出荷先と出荷量の調整、6. 栽培技術の支援、7. 組合の結成と活動状況、8. 生産者の状況、9. 産地の抱える問題点、の順に整理する。前述1節～7節は文献や資料、JAへの聞き取り調査により検討し、前述8節と9節は各生産者への聞き取り調査のデータにより検討する。III章では山形県の啓翁桜産地の産地振興のために行われている山形県啓翁桜品評会や各種キャンペーン、事業の内容について明らかにする。IV章では本稿の要点について述べる。

JAみちのく村山の管轄地域における各生産者への聞き取り調査は、2018年8月7日～12月1日にかけて行った。2018年度の実産者数は16戸であるが、聞き取り調査ができたのは全体の75.0%にあたる12戸であった。

生産者数は、酒井・浜西（2019、2020、2022）と同様にJAへの聞き取り調査で明らかにしたが、生産者名やその所在地および連絡先はインターネットでの検索や生産者からの紹介、住宅地図を利用して明らかにした。また、各生産者への聞き取り調査では生産者の生年月日と性別と続柄、栽培開始年、啓翁桜以外に栽培している農作物など、樹園地、作付面積、例年の平均出荷量、出荷先、生産者からみた当産地の抱える問題点について行った。

Ⅱ. 啓翁桜産地の生産流通構造 ——JAみちのく村山——

1. 栽培の始まり

JAみちのく村山の管轄地域は、村山市、尾花沢市、大石田町の2市1町である（第1図）。このうち、啓翁桜の栽培は村山市と尾花沢市で行われている。村山市と尾花沢市では生産者がそれぞれに栽培を始めたため、先駆者などによる栽培の呼びかけはみられない。

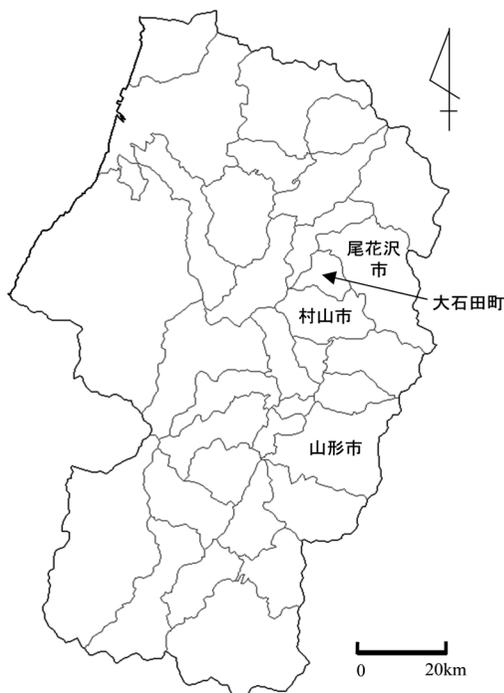
尾花沢市では、1993年に米やスイカなどの生産者である管藤成夫氏（当時38歳）が冬季の収入減として啓翁桜の栽培を始めた。栽培を始める前には花き・花木生産者である山形市の石井久作氏や、舟形町で1978年に啓翁桜の栽培を始めた叶内次男氏の助言を受けた。

村山市では、各生産者への聞き取り調査によると、村山市河島甲（かわしまこう）の柴田正治氏が啓翁桜の栽培を始めた。柴田正治氏は他界しており、その後は啓翁桜の栽培を行っていないため、啓翁桜の栽培開始年、栽培を始める前の職業や農作物、栽培の動機、栽培方法の習得については不明である。また、柴田正治氏の次に古い生産者については、聞き取り調査の中で明らかにすることができなかった。

2018年度の生産者数は16戸であるが、啓翁桜の栽培を始めるにあたり多くの生産者が理解していたことは、各生産者への聞き取り調査によると、①収入が安定して得られる農作物であること、②枝切りや促成室での促成管理などの作業は冬が中心であるため、水稲との複合経営が可能であること、③山形県内で栽培が始まった花木であること、④山形県内各地の生産者や山形県の農業技術普及課により栽培技術が確立されていたこと、の4点である。

2. 生産者数の推移

生産者数は、2018年9月14日と10月5日に行ったJAみちのく村山への聞き取り調査によると、2014年度は15戸（村山市11戸、尾花沢市4戸）、2015年度は15戸（村山市11戸、尾花沢市4戸）であった。続いて、2016年度は14戸（村



第1図 JAみちのく村山の管轄地域

山形市はJAみちのく村山の管轄地域ではないが、他の市町との位置関係を把握しやすくするために記載した。

山市10戸、尾花沢市4戸）、2017年度は14戸（村山市10戸、尾花沢市4戸）、2018年度は16戸（村山市12戸、尾花沢市4戸）となっている。2007年度以前の生産者数はJAみちのく村山で集計していないため不明である。なお、JAみちのく村山では尾花沢市分のみ2008年度～2013年度の生産者数を集計している。それによると、2008年度は4戸、2009年度は4戸、2010年度は6戸、2011年度は6戸、2012年度は6戸、2013年度は5戸となっている。

3. 樹園地と作付面積

村山市では櫛山（たもやま）、袖崎（そでさき）、土生田（とちうだ）、河島乙（かわしまおつ）、名取（なとり）など、尾花沢市では正巖（しょうごん）、丹生（にゅう）、名木沢（なきさわ）、毒沢（どくさわ）などにある樹園地で啓翁桜の栽培が行われている。樹園地は、村山

市では主に標高約100m～約150mにある畑、転作田、耕作放棄地を利用している。また、尾花沢市では主に標高約100m～約250mにある畑を利用している。

作付面積は、2018年9月14日と10月5日に行ったJAみちのく村山への聞き取り調査によると、2014年度は約9.5ha（村山市約4.2ha、尾花沢市約5.3ha）、2015年度は約9.5ha（村山市約4.2ha、尾花沢市約5.3ha）であった。続いて、2016年度は約10.1ha（村山市約4.8ha、尾花沢市約5.3ha）、2017年度は約10.1ha（村山市約4.8ha、尾花沢市約5.3ha）、2018年度は約10.3ha（村山市約5.0ha、尾花沢市約5.3ha）となっている。2007年度以前の作付面積はJAみちのく村山で集計していないため不明である。なお、JAみちのく村山では尾花沢市分のみ2008年度～2013年度の作付面積を集計している。それによると、2008年度は約5.3ha、2009年度は約5.5ha、2010年度は約6.4ha、2011年度は約6.1ha、2012年度は約6.1ha、2013年度は約5.9haとなっている。

4. 集出荷を行う作業室を併設した促成室の整備状況

JAみちのく村山における集出荷を行う作業室を併設した促成室の整備状況は、2017年12月26日と2018年9月14日に行ったJAみちのく村山村山営農センター花木生産部への聞き取り調査によると、村山市では楯岡北町にあるJAみちのく村山本所の敷地内の「花木促成ハウス」を利用している^{▼3}。花木促成ハウスを建設した際の事業名は不明であるが、構造は足場を組んで2階建て、面積は約1,200㎡である（写真1、写真2、写真3）。

集出荷を行う作業室を併設した促成室では、切り枝（粗枝）の調整と結束、休眠打破処理、促成室での促成管理を12月上旬～3月中旬まで行い、選別と箱詰めを含む出荷は12月下旬～3月下旬まで行う。促成室には12月上旬にまとめて入れるため、各生産者はこの時期の前に枝切りした啓翁桜を自家用のトラックで搬入する。12月上旬に促成室に入れた啓翁桜は12月下旬までに出荷し、12月中旬から3月中旬に促成室に

入れた啓翁桜は1月上旬から3月下旬に順次出荷する。切り枝（粗枝）の調整と結束から選別と箱詰めを含む出荷の作業は、火、木、日曜日の9：00～11：00までJAみちのく村山村山営



写真1 村山市にある「花木促成ハウス」
19. 2. 7撮影



写真2 村山市にある「花木促成ハウス」の内部①
19. 2. 7撮影



写真3 村山市にある「花木促成ハウス」の内部②
19. 2. 7撮影

農センター花木生産部の担当者1名を含む職員2～3名と雇用しているJAみちのく村山村山営農センター花木生産部の会員3名で行っている。選別の長さで等級は、長さが70cm、80cm、100cm、120cm、140cmの5つあり、等級はそれぞれの長さで秀、優、無がある。促成室から市場へ出荷するときはJA全農山形ライフサポートの手配する運送業者が行う。

一方、尾花沢市では、2018年10月5日に行ったJAみちのく村山尾花沢営農センター花木生産部への聞き取り調査によると、生産者が共同で利用する促成室を整備していない。そのため、促成室は各生産者が所有している(写真4)。尾花沢市の各生産者は、自己管理の下、休眠打破処理、促成室での促成管理、選別と箱詰めを含む出荷、集出荷場への商品の搬入までの作業を行う。選別の長さで等級は、長さが70cm、90cm、125cm、145cmの4つあり、等級はそれぞれの長さで秀、優、無(等級が「無」の場合は「○」(まる)で示している)がある。集出荷場は、尾花沢市新町にあるJAみちのく村山尾花沢営農センター中の段集荷場となる(写真5)⁴。JAみちのく村山尾花沢営農センター中の段集荷場には、12月下旬～2月下旬の火、木、日曜日の9:00～11:00までに搬入する。集出荷場ではJAみちのく村山尾花沢営農センター花木生産部の担当者が長さ、等級、出荷量を確認して出荷する。集出荷場から市場へ出荷するときはJA全農山形ライフサポートの手配する運送業者が行う。



写真4 尾花沢市の生産者が所有する促成室
18. 11. 15撮影

5. JAからの出荷先と出荷量の調整

出荷量は、2018年9月14日と2018年10月5日に行ったJAみちのく村山への聞き取り調査によると、2013年度は約3万7千本(村山市約3万本、尾花沢市約7千本)、2014年度は約9万3千本(村山市約6万5千本、尾花沢市約2万8千本)であった。続いて、2015年度は約9万9千本(村山市約6万本、尾花沢市約3万9千本)、2016年度は約5万6千本(村山市約4万本、尾花沢市約1万6千本)、2017年度は約10万8千本(村山市約7万9千本、尾花沢市約2万9千本)となっている。2007年度以前の出荷量はJAみちのく村山で集計していないため不明である。なお、JAみちのく村山では尾花沢市分のみ2008年度～2012年度の出荷量を集計している。それによると、2008年度は約4万6千本、2009年度は約6万5千本、2010年度は約4万7千本、2011年度は約4万8千本、2012年度は約7千本となっている。

出荷額は、2018年9月14日と2018年10月5日に行ったJAみちのく村山への聞き取り調査によると、2013年度は約490万円(村山市約400万円、尾花沢市約90万円)、2014年度は約4,150万円(村山市約750万円、尾花沢市約3,400万円)であった。続いて、2015年度は約5,100万円(村山市約800万円、尾花沢市約4,300万円)、2016年度は約3,300万円(村山市約700万円、尾花沢市約2,600万円)、2017年度は約4,800万円(村山市約1,000万円、尾花沢市約3,800万円)となっている。2007年度以前の出荷額はJAみちのく村山で集計していないため不明である。なお、



写真5 JAみちのく村山尾花沢営農センター中の段集荷場 18. 11. 15撮影

JA みちのく村山では尾花沢市分のみ2008年度～2012年度の出荷額を集計している。それによると、2008年度は約4,000万円、2009年度は約4,800万円、2010年度は約4,700万円、2011年度は約4,800万円、2012年度は約90万円となっている。尾花沢市の2012年度と2013年度の出荷量と出荷額が激減している理由は、豪雪による枝折れの被害が発生したためである。

例年の出荷先は、2018年9月14日と2018年10月5日に行ったJA みちのく村山への聞き取り調査によると、①東京都中央卸売市場大田市場には約40%、②東京都中央卸売市場世田谷市場には約15%、③大阪鶴見花き地方卸売市場には約15%、④JA 全農山形ギフト市場には約10%、⑤東京都中央卸売市場葛西市場には約5%、⑥その他の市場には合わせて約15%となっている。

6. 栽培技術の支援

村山市の生産者への啓翁桜の栽培技術の支援は、2017年12月26日に行ったJA みちのく村山村山営農センター花木生産部への聞き取り調査によると、JA みちのく村山村山営農センター花木生産部と山形県村山総合支庁産業経済部北村山農業技術普及課との共同で行っている⁵。4月には出荷に適した枝を作るための栽培技術講習会、11月下旬には生産者間の品質や出荷規格を統一するための目揃え会を実施している。また、病虫害防除や環状剥皮処理についてはパンフレットを配布している。さらに、新規の生産者にはJA みちのく村山村山営農センター花木生産部の部長が栽培技術の指導を行っている。

一方、尾花沢市の生産者への啓翁桜の栽培技術の支援は、2018年10月5日に行ったJA みちのく村山尾花沢営農センター花木生産部への聞き取り調査によると、JA みちのく村山尾花沢営農センター花木生産部と山形県村山総合支庁産業経済部北村山農業技術普及課の共同で行っている。11月中旬には生産者の樹園地を借りて行う栽培技術講習会、11月下旬と1月上旬には目揃え会、2月下旬～3月上旬には検討会を実施している。11月下旬に実施する目揃え会、促成

室に入室する前に生産者の促成室を借りて行い、1月上旬に実施する目揃え会は出荷のピークを迎える前にJA みちのく村山尾花沢営農センター中の段集荷場で行っている。検討会は本年度の出荷が終了する2月下旬～3月上旬に尾花沢市の飲食店を会場に約1時間行い、その後は懇親会を行っている。検討会は、本年度の出荷量や出荷額の確認と問題点を話し合い、今後の栽培技術の向上につなげるために実施している。この他、樹園地巡回はJA みちのく村山尾花沢営農センター花木生産部と山形県村山総合支庁産業経済部北村山農業技術普及課の担当者が適宜実施している。何か問題がある場合は生産者へ連絡している。

病虫害防除や環状剥皮処理については、JA みちのく村山村山営農センター花木生産部、JA みちのく村山尾花沢営農センター花木生産部ともに山形県村山総合支庁産業経済部北村山農業技術普及課が発行するパンフレットを年4～5回配布している。

7. 組合の結成・活動状況

JA みちのく村山の管轄地域では、生産者からなる組合は結成されていない。そのため、村山市の生産者への栽培技術に関する講習会などの活動は、Ⅱ章6節に記述したJA みちのく村山村山営農センター花木生産部と山形県村山総合支庁産業経済部北村山農業技術普及課との共同で行っている。また、尾花沢市の生産者への栽培技術に関する講習会などの活動は、Ⅱ章6節に記述したJA みちのく村山尾花沢営農センター花木生産部と山形県村山総合支庁産業経済部北村山農業技術普及課の共同で行っている。

8. 生産者の状況

産地全体の生産者年齢構成（第1表）は、生産者合計は28（男19、女9）人で、その生産者は20歳代～80歳代までいるが、とくに50～59歳は7（男4、女3）人と60～69歳は7（男5、女2）人ずつと多い。続いて、70～79歳は5（男4、女1）人、20～29歳は4（男3、女1）人、40～49歳は3（男2、女1）人、80～89歳は2

第1表 産地全体の生産者年齢構成

	男	女
90歳以上	0	0
80～89歳	1	1
70～79歳	4	1
60～69歳	5	2
50～59歳	4	3
40～49歳	2	1
30～39歳	0	0
20～29歳	3	1
10～19歳	0	0
計	19	9

単位：人
聞き取り調査により作成。

(男1、女1)人となっている。

産地全体の生産者平均年齢は、表には示していないが58.1(男58.1、女58.1)歳である。JAみちのく村山では、生産者の高齢化は進んでいるものの、20歳代～50歳代の生産者は合わせて半数にあたる14人がいるため、後継者は着実に育成されている。

1戸ごとの生産者年齢構成(第2表)は、①生産者番号1は60～69歳に男1人、50～59歳に女1人、20～29歳に男1人、②生産者番号2は80～89歳に男女1人ずつ、50～59歳に男1人、20～29歳に男女1人ずつ、③生産者番号3、5は50～59歳に男1人となっている。続いて、④生産者番号4は70～79歳に男1人、50～59歳に男女1人ずつ、20～29歳に男1人、⑤生産者番号6は60～69歳と40～49歳に男女1人ずつ、⑥生産者番号7は60～69歳に男女1人ずつ、⑦生産者番号8は60～69歳に男1人となっている。さらに、⑧生産者番号9は70～79歳に男1人、⑨生産者番号10は70～79歳に男女1人ずつ、⑩生産者番号11は70～79歳に男女1人ずつ、40～49歳に男1人、⑪生産者番号12は60～69歳に男1人、50～59歳に女1人となっている。このように、1戸あたりの生産者数は1～5人であり、うち1人は4戸、2人は4戸、3人は1戸、4

人は2戸、5人は1戸となっている。2～5人の場合は夫婦や親子による経営である。また、後継者がいる、もしくは親がリタイアし、子のみで栽培を行っているのは生産者番号1、2、3、4、5、6、11、12の8戸である。

栽培開始年(第3表)は、1989年以降、0戸の年もあるが、1988年は4戸と最多であった。続いて、2003年は2戸、1989年、1990年、1993年、2008年、2013年、2014年は1戸ずつとなっている。尾花沢市では1993年に啓翁桜の栽培が始まったが、その生産者は現在も栽培を行っている。村山市では柴田正治氏が啓翁桜の栽培を始めたが、現在は栽培していないため、栽培開始年や経緯などについては聞き取り調査の中で明らかにすることができなかった。また、村山市で柴田正治氏の次に古い生産者については聞き取り調査の中で明らかにすることができなかった。

栽培作物の組み合わせ型(第4表)は、①啓翁桜+米+果樹は5戸、②啓翁桜+果樹は2戸であった。続いて、③啓翁桜+米、④啓翁桜+育苗、⑤啓翁桜+果樹+特用林産物、⑥啓翁桜+米+果樹+特用林産物、⑦啓翁桜+米+果樹+特用林産物+育苗は1戸ずつとなっている。啓翁桜のみの生産者はいなく、生産者は啓翁桜と他の農作物や林産物、育苗を組み合わせた経営を行っている。全体的には果樹を栽培している生産者は10戸と多く、米を栽培している生産者は8戸、特用林産物を栽培している生産者は3戸、育苗の生産者は2戸と続いている。果樹ではスイカ、サクランボ、リンゴ、モモ、メロンの中から1～2つ、特用林産物ではタラの芽、ウルイ、フキノトウの中から1～3つを栽培している。育苗の生産はスイカの苗となっている。

出荷先の組み合わせ型(第5表)は、①JAみちのく村山に100%出荷している生産者(11戸)と、②JAみちのく村山へのお荷と個人で販売する直売の両方を行っている生産者(1戸)の2つがある。前述②のJAみちのく村山へのお荷と直売のお荷量の割合は、JAみちのく村山へのお荷量が約95%、直売が約5%というように

第2表 1戸ごとの生産者年齢構成

生産者番号1			生産者番号2			生産者番号3、5			生産者番号4		
	男	女		男	女		男	女		男	女
90歳以上	0	0	90歳以上	0	0	90歳以上	0	0	90歳以上	0	0
80～89歳	0	0	80～89歳	1	1	80～89歳	0	0	80～89歳	0	0
70～79歳	0	0	70～79歳	0	0	70～79歳	0	0	70～79歳	1	0
60～69歳	1	0	60～69歳	0	0	60～69歳	0	0	60～69歳	0	0
50～59歳	0	1	50～59歳	1	0	50～59歳	1	0	50～59歳	1	1
40～49歳	0	0	40～49歳	0	0	40～49歳	0	0	40～49歳	0	0
30～39歳	0	0	30～39歳	0	0	30～39歳	0	0	30～39歳	0	0
20～29歳	1	0	20～29歳	1	1	20～29歳	0	0	20～29歳	1	0
10～19歳	0	0	10～19歳	0	0	10～19歳	0	0	10～19歳	0	0
計	2	1	計	3	2	計	1	0	計	3	1

生産者番号6			生産者番号7			生産者番号8			生産者番号9		
	男	女		男	女		男	女		男	女
90歳以上	0	0									
80～89歳	0	0									
70～79歳	0	0	70～79歳	0	0	70～79歳	0	0	70～79歳	1	0
60～69歳	1	1	60～69歳	1	1	60～69歳	1	0	60～69歳	0	0
50～59歳	0	0									
40～49歳	1	1	40～49歳	0	0	40～49歳	0	0	40～49歳	0	0
30～39歳	0	0									
20～29歳	0	0									
10～19歳	0	0									
計	2	2	計	1	1	計	1	0	計	1	0

生産者番号10			生産者番号11			生産者番号12		
	男	女		男	女		男	女
90歳以上	0	0	90歳以上	0	0	90歳以上	0	0
80～89歳	0	0	80～89歳	0	0	80～89歳	0	0
70～79歳	1	1	70～79歳	1	1	70～79歳	0	0
60～69歳	0	0	60～69歳	0	0	60～69歳	1	0
50～59歳	0	0	50～59歳	0	0	50～59歳	0	1
40～49歳	0	0	40～49歳	1	0	40～49歳	0	0
30～39歳	0	0	30～39歳	0	0	30～39歳	0	0
20～29歳	0	0	20～29歳	0	0	20～29歳	0	0
10～19歳	0	0	10～19歳	0	0	10～19歳	0	0
計	1	1	計	2	0	計	1	1

単位：人
聞き取り調査により作成。

JA みちのく村山への出荷量の方が圧倒的に多い。このように、JA みちのく村山の管轄地域では、出荷先の組み合わせ型は2つあるが、JA みちのく村山には2つのタイプともにすべての生産者が出荷している。

例年の平均出荷量（第6表）は、非公表の生

産者番号12を除くと約2,000本～約20,000本まであるが、この中で生産者数が一番多いのは約5,000本の3戸である。JA みちのく村山以外では、約100,000本、約70,000本、約50,000本を出荷する生産者もいるが、それに比べるとJA みちのく村山の生産者の出荷量は少ない。

第3表 栽培開始年

年	生産者数	年	生産者数
1989年	1	2004年	0
1990年	1	2005年	0
1991年	0	2006年	0
1992年	0	2007年	0
1993年	1	2008年	1
1994年	0	2009年	0
1995年	0	2010年	0
1996年	0	2011年	0
1997年	0	2012年	0
1998年	4	2013年	1
1999年	0	2014年	1
2000年	0	2015年	0
2001年	0	2016年	0
2002年	0	2017年	0
2003年	2	2018年	0
		計	12

単位：戸
聞き取り調査により作成。

第4表 栽培作物の組み合わせ型

栽培作物	生産者数
①啓翁桜+米+果樹	5
②啓翁桜+果樹	2
③啓翁桜+米	1
④啓翁桜+育苗（スイカの苗）	1
⑤啓翁桜+果樹+特用林産物	1
⑥啓翁桜+米+果樹+特用林産物	1
⑦啓翁桜+米+果樹+特用林産物+育苗（スイカの苗）	1
計	12

単位：戸
聞き取り調査により作成。

第5表 出荷先

生産者番号	出荷先
1	JAみちのく村山が100%
2	JAみちのく村山が100%
3	JAみちのく村山が100%
4	JAみちのく村山が約95%、直売が約5%
5	JAみちのく村山が100%
6	JAみちのく村山が100%
7	JAみちのく村山が100%
8	JAみちのく村山が100%
9	JAみちのく村山が100%
10	JAみちのく村山が100%
11	JAみちのく村山が100%
12	JAみちのく村山が100%

聞き取り調査により作成。

第6表 例年の平均出荷量

出荷量	生産者数
約2,000本	1
約4,000本	2
約5,000本	3
約6,000本	1
約7,000本	1
約8,000本	1
約10,000本	1
約20,000本	1
計	11

単位：戸
生産者番号12は、N. A. のため省略した。
聞き取り調査により作成。

出荷量が多い生産者は、作付面積も大きい傾向にある。表には示さないが、出荷量が約2,000本～約5,000本の生産者は作付面積が約0.2ha～約0.4ha、同じく約6,000本～約8,000本の生産者は作付面積が約0.5ha～約1.0ha、同じく約10,000本～約20,000本の生産者は作付面積が約1.2ha～約1.5haとなっている。

9. 産地の抱える問題点

各生産者からみた当産地の抱える問題点は第7表に示した。便宜的に半数にあたる6戸以上の回答があった問題点は、①「天候不順による出荷量への影響が大きい」が12戸、②「生産者の高齢化が進んでいる」が11戸、③「生産者によって品質にばらつきがある」が10戸、④「手入れや作業が難しい」が8戸、⑤「後継者が不足している」が7戸、⑥「啓翁桜と他の農産物の栽培が重複する」が6戸の6つであった。

一方、回答が半数以下となったのは、⑦「高齢者の労働の負担感が大きい」が4戸、⑧「啓翁桜の収益率が悪い」が4戸、⑨「啓翁桜の需要喚起が必要である」が4戸、⑩「産地としてのまとまりが不足している」が4戸、⑪「ウソ

による花芽被害の影響が大きい」が1戸、⑫「啓翁桜の販路拡大が必要である」が1戸、⑬「肥料代や薬品代が高い」が0戸の7つであった。

各年の出荷量は、前述①の大雪、強風、干ばつなどの天候不順の影響により増減するが、啓翁桜は露地栽培であるため、この被害を完全に防ぐことは難しい問題でもある。

前述②の生産者の高齢化や前述⑤の後継者の不足は、多くの生産者が問題視している。この問題はⅡ章8節の産地全体の生産者年齢構成でも指摘したが、生産者の高齢化は進んでいるものの、20歳代～50歳代の生産者は生産者合計28人中半数にあたる14人がいるため、後継者は着実に育成されている面もある。JAみちのく村山の啓翁桜産地は、今後生産者のリタイアが続いた場合、縮小化は避けられないが、存続はできると考える。啓翁桜の作付面積の拡大や出荷量の増加のためには将来を担う若年の後継者が多く必要であるため、今後はJAみちのく村山村山営農センター花木生産部、JAみちのく村山尾花沢営農センター花木生産部、山形県村山総合支庁産業経済部北村山農業技術普及課によって強化策を検討する必要があると考える。

第7表 産地の抱える問題点

問 題 点	生産者番号												計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
生産者の高齢化が進んでいる	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	11戸
後継者が不足している			○				○	○	○	○	○	○	7戸
高齢者の労働の負担感が大きい		○		○		○				○			4戸
啓翁桜と他の農産物の栽培が重複する		○	○	○			○			○		○	6戸
天候不順による出荷量への影響が大きい	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12戸
手入れや作業が難しい		○	○		○		○	○	○	○	○	○	8戸
ウソによる花芽被害の影響が大きい							○						1戸
肥料代や薬品代が高い													0戸
啓翁桜の収益率が悪い	○		○	○		○							4戸
生産者によって品質にばらつきがある	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○		10戸
啓翁桜の需要喚起が必要である			○	○		○						○	4戸
啓翁桜の販路拡大が必要である							○						1戸
産地としてのまとまりが不足している	○			○		○			○				4戸

聞き取り調査により作成。

前述④の手入れや作業が難しいについては、生産者番号3と生産者番号5は5月中旬～6月中旬にかけて行う環状剥皮処理が難しいとの回答が得られた。

前述③の生産者による品質のばらつきを小さくするためには、生産者番号1は啓翁桜生産者による話し合いをすることが必要であるとの意見や、生産者番号5は各生産者が栽培技術講習会で学習したことを実践できるかどうかが重要であるとの意見があった。

前述⑥の啓翁桜と他の農作物の栽培が重複することについては、生産者番号3は3月下旬が啓翁桜の出荷時期の終わりの時期と稲の種まきの始まるの時期が重複するとの回答が得られた。

Ⅲ. 山形県における啓翁桜産地の産地振興への取り組み

1. 山形県啓翁桜品評会

広辞苑(2018)によると、品評とは「作品や作物の優劣・高下を論じ定めること。しなさだめ。批評。品藻。品題。」のことであり、同じく品評会とは「作品・作物などを集めて品評する会」である。また、日本大辞典刊行会編(2001)によると、品評については記載がないが、品評会とは「産物・製品などを一堂に集めて、そのよしあしを定める会」のことである。このように、品評会は農産物のみならず様々な作品や製品で開催している会である。

山形県啓翁桜品評会は、毎年1月下旬にJA全農山形と山形県JA園芸振興協議会、山形県花き生産連絡協議会が啓翁桜の高品質生産に向けた栽培技術の研鑽と更なる知名度の向上のために開催している。会場は、2019年度までは東根市のさくらんぼタントクルセンターであったが、2020年度からはJR山形駅西口と直結する山形市の霞城セントラル1階アトリウムに変更となった。

入賞は、2021年度まではLサイズの部、2Lサイズの部に関係なく金賞(第一席)・山形県知事賞、金賞(第二席)・山形県花き研究会長賞、銀賞、銅賞、努力賞を選んできた。2022年

度からは、2Lサイズの部は金賞(第一席)・山形県知事賞、銀賞・山形県花き生産連絡協議会長賞、銅賞、Lサイズの部は金賞(第二席)・山形県花き研究会長賞、銀賞・山形県花き生産連絡協議会長賞、銅賞を選ぶ方針に変更となった。

審査員は山形県農業総合研究センター園芸試験場、山形県花き研究会、山形県JA園芸振興協議会、山形県花き生産連絡協議会、JA全農山形、(株)山形生花地方卸売市場などの関係者が務める。主な審査項目は花つき、枝ぶり、花色、全体のバランスの確認である。

金賞(第一席)・山形県知事賞の入賞品は山形県庁の1階ロビー、その他の入賞品は霞城セントラル1階アトリウムに「さくら咲くやまがた冬のさくらキャンペーン」の一環として山形県啓翁桜品評会の翌日から2月上旬まで展示が行われている。

第8表はJA全農山形のWebサイト内の「NEWS & TOPICS」で公表している「山形県啓翁桜品評会入賞者」の各年版より2005年度～2021年度までの山形県啓翁桜品評会の入賞者数をJAごとに整理したものである⁶。出品総数は、2019年度は54点、2020年度は59点、2021年度は63点、2022年度は68点のように年度により増減があるが、最少の年度では40点台、最多の年度では60点台である。この表の合計を見ると、金賞、銀賞、銅賞、努力賞は7つのJAともに入賞している生産者がいる。金賞は34人のうちJAやまがたが20人(58.9%)と圧倒的に多く、JA山形おきたまが6人と続いている。銀賞は51人のうちJA山形おきたまが15人、JAやまがたが13人、JAさくらんぼひがしねが12人と僅差で続いている。銅賞は90人のうちJA山形おきたまが24人とJAさくらんぼひがしねが23人と僅差であり、JAやまがたが17人と続いている。努力賞は45人のうちJAさがえ西村が12人とJAさくらんぼひがしねが10人と僅差であり、JA山形おきたまが7人と続いている。合計では220人のうちJAやまがたが53人とJA山形おきたまが52人と僅差であり、JAさくらんぼひがしねが47人と続いている。

第8表 山形県啓翁桜品評会の入賞者数（2005年度～2021年度）

JA名	2005年度				2006年度				2007年度			
	金賞	銀賞	銅賞	努力賞	金賞	銀賞	銅賞	努力賞	金賞	銀賞	銅賞	努力賞
JAやまがた	1		2		1		1	1	2		2	
JA山形おきたま			1	1		1	1				1	1
JAさくらんぼひがしね	1	3	1			1	2	1		2	1	1
JAさがえ西村山			1					1				1
JAみちのく村山					1			1		1		
JAてんどう				1		1	1				1	
JA庄内みどり												
合計	2	3	5	2	2	3	5	4	2	3	5	3

JA名	2008年度				2009年度				2010年度			
	金賞	銀賞	銅賞	努力賞	金賞	銀賞	銅賞	努力賞	金賞	銀賞	銅賞	努力賞
JAやまがた	1		1		2		1		1	2	1	
JA山形おきたま		1	1	1		2	1	1			1	
JAさくらんぼひがしね		2	2	1			2				1	1
JAさがえ西村山	1			2				2			1	1
JAみちのく村山			1			1	1			1	1	
JAてんどう				1								
JA庄内みどり				1				1	1			
合計	2	3	5	6	2	3	5	4	2	3	5	2

JA名	2011年度				2012年度				2013年度			
	金賞	銀賞	銅賞	努力賞	金賞	銀賞	銅賞	努力賞	金賞	銀賞	銅賞	努力賞
JAやまがた	1				1				1	1		
JA山形おきたま			1		1		2		1	2	2	
JAさくらんぼひがしね		2	1	1		1	2				2	
JAさがえ西村山	1	1						1				1
JAみちのく村山			1	1				1				1
JAてんどう						1	1				1	
JA庄内みどり			1			1						
合計	2	3	4	2	2	3	5	2	2	3	5	2

JA名	2014年度				2015年度				2016年度			
	金賞	銀賞	銅賞	努力賞	金賞	銀賞	銅賞	努力賞	金賞	銀賞	銅賞	努力賞
JAやまがた	1	1	2		1	2	2		1	1		
JA山形おきたま	1	1					1	1	1	1	1	
JAさくらんぼひがしね		1	2				2	2			2	
JAさがえ西村山				1		1						
JAみちのく村山				1		1	1				1	
JAてんどう			1		1							
JA庄内みどり												1
合計	2	3	5	2	2	4	6	3	2	2	4	1

JA名	2017年度				2018年度				2019年度			
	金賞	銀賞	銅賞	努力賞	金賞	銀賞	銅賞	努力賞	金賞	銀賞	銅賞	努力賞
JAやまがた	2		1	1	1	1	1		1	1	1	
JA山形おきたま		3	3	1		1	1	1	1	1	1	
JAさくらんぼひがしね				1			1	1			1	
JAさがえ西村山			1					1			1	
JAみちのく村山							1				1	
JAてんどう					1	1	1			1	1	
JA庄内みどり								1			1	
合計	2	3	5	3	2	3	5	4	2	3	7	0

JA名	2020年度				2021年度				2005年度～2021年度の合計			
	金賞	銀賞	銅賞	努力賞	金賞	銀賞	銅賞	努力賞	金賞	銀賞	銅賞	努力賞
JAやまがた	1	2	1		1	2	1		20	13	17	2
JA山形おきたま	1	1	4			1	2		6	15	24	7
JAさくらんぼひがしね				1	1		1		2	12	23	10
JAさがえ西村山			1					1	2	2	5	12
JAみちのく村山			1				1		1	4	10	5
JAてんどう				1			2		2	4	9	3
JA庄内みどり				1				1	1	1	2	6
合計	2	3	7	3	2	3	7	2	34	51	90	45

単位：人

JA全農山形のWebサイトで公表されている「山形県啓翁桜品評会入賞者」の各年版により作成。
2005年度～2021年度の合計のグレーになっている箇所は、各賞の最多であることを示す。

金賞はこれまで19人の生産者が入賞している。その内訳は同一生産者が6回入賞1人、同一生産者が5回入賞1人、同一生産者が4回入賞1人、同一生産者が2回入賞3人、1回入賞が13人となっている。最多の6回入賞はJAやまがたの生産者で2006年度、2007年度、2009年度、2010年度、2017年度、2021年度に入賞している。5回入賞はJAやまがたの生産者で2011年度、2012年度、2014年度、2015年度、2016年度に入賞している。4回入賞はJA山形おきたまの生産者で2012年度、2013年度、2014年度、2016年度に入賞している。2回入賞は3人ともJAやまがたの生産者で、それぞれ①2005年度と2008年度、②2013年度と2018年度、③2017年度と2019年度に入賞している。

2017年5月14日～2020年4月10日にかけて実施した山形県内の啓翁桜生産者への聞き取り調査の中では、山形県啓翁桜品評会の入賞品を見

て入賞者に栽培技術を教えてもらい活かしていること、遠方の生産者には山形県啓翁桜品評会の時に会うため情報交換の場になっていることを多く伺った。また、山形県啓翁桜品評会の入賞者の中には、JAや産地組合や行政が開催する栽培技術講習会の講師、行政や企業などが開催するフラワーデザイン教室や講演会の依頼を受けて講師を務めている。このように、山形県啓翁桜品評会は前述した目的の下、多くの生産者が出品し賞を競うだけでなく、栽培技術の習得、情報交換、講習会や講演会などの講師依頼と利活用している。山形県における啓翁桜産地の産地振興のためには山形県啓翁桜品評会を継続して開催することが重要である。

山形県啓翁桜品評会の他、JA庄内みどり花き部会花木専門部ではJA庄内みどりの啓翁桜品評会を2月上旬に酒田市役所で開催している。入賞は金賞、銀賞、銅賞の3つがあり、審

査員は山形県庄内総合支庁産業経済部酒田農業技術普及課、JA 庄内みどり花き部会花木専門部の専門部長が務める。主な審査項目は桜のボリューム、バランス、色味の確認である。

2. さくら咲くやまがた冬のさくらキャンペーン

「さくら咲くやまがた冬のさくらキャンペーン」は、2010年の第1回より毎年1月上旬～2月中旬に冬のさくらキャンペーン実行委員会が主催するイベントである。協力は山形まちづくり株式会社、後援は山形県と一般社団法人山形市観光協会である。

「冬のさくらキャンペーン2023」のパンフレットによると、「第14回さくら咲くやまがた冬のさくらキャンペーン」は、2023年1月7日～2月12日に行われた。このキャンペーンでは、山形市中心部にある各施設に啓翁桜のフラワーデザインを展示し、桜に関連する飲食や和洋菓子などを提供する。他には、「さくらのトートバッグや巾着をつくろう」体験、各施設を巡ってスタンプを集め抽選で景品が当たる「桜の花びらスタンプラリー」などのイベントを行っている。

啓翁桜のフラワーデザインは、山形市役所1階正面入口、山形グランドホテル、ホテルメトロポリタン山形、山形七日町ワシントンホテル、山形駅西口ワシントンホテル、ホテルキャッスル、山形国際ホテル、N-GATE NANOKAMACHI、水の町屋・七日町御殿堰、山形まるごと館・紅の蔵、七日町商店街振興組合の協賛店で展示を行っている。山形県外ではキャンペーン期間中に東京都中央区にある山形市東京事務所（東京建物八重洲ビル）でも啓翁桜のフラワーデザインの展示を行っている。

ここでフラワーデザインの意味を整理しておくと、フラワーデザインとは「生花を用いた装飾」のことである（広辞苑2018）。また、日本大辞典刊行会編（2001）によると、フラワーデザインとは「生花を素材とした装飾。服飾や部屋飾りなどに用いる。」のことである。フラワーデザインはフラワーアレンジメントとも呼ばれている。

写真6は、これまで「さくら咲くやまがた冬のさくらキャンペーン」の期間中に撮影した山形市内の啓翁桜のフラワーデザインと桜に関連したメニューをまとめたものである。啓翁桜のフラワーデザインは、ホテルメトロポリタン山形（2020.2.9、2023.1.25）、山形まるごと館・紅の蔵（2020.2.9、2020.2.26、2021.1.27）で撮影した。山形まるごと館・紅の蔵では、2023年1月25日に「第14回さくら咲くやまがた冬のさくらキャンペーン」で提供している「さくらメニュー」を撮影した。この「さくらメニュー」は桜えびのかき揚げそば（温）、桜えびのおにぎり（つや姫使用）、サクランボ漬けのセットで税込1,100円である。啓翁桜のフラワーデザインはどこの施設でも大きくて見ごたえがあるとともに、期間中は定期的に入れ替えを行い新しい花が咲いているため、フラワーデザインの前では鑑賞している人、写真を撮影している人、啓翁桜の簡単な説明パネルを読んでいる人をよく見かける。

3. やまがた冬のあった回廊キャンペーン

「やまがた冬のあった回廊キャンペーン」は、毎年12月上旬～3月下旬にやまがた冬のあった回廊キャンペーン実行委員会が主催するイベントである。事務局は米沢市の山形県置賜総合支庁観光振興室内にある。このキャンペーンは、置賜地域の3市5町（米沢市、長井市、南陽市、高島町、川西町、小国町、白鷹町、飯豊町）と上山市の雪祭り、スキーやスノーボードなどの雪遊び、雪板すべりやワカサギ釣りなどの体験、飲食、特産品、温泉、雛回廊、啓翁桜を宣伝するために開催している。

2022年度の「やまがた冬のあった回廊キャンペーン」は、「やまがた冬のあった回廊キャンペーン」のWebサイトによると2022年12月1日～2023年3月31日に行われた⁷。啓翁桜のフラワーデザインは各地の鉄道駅、道の駅、観光案内所、宿泊施設、観光施設で展示が行われた。展示場所は、米沢市は15か所（JR米沢駅、道の駅田沢、道の駅米沢、小野川温泉かまくら村など）、上山市は5か所（かみのやま温泉観光



ホテルメトロポリタン山形 2020. 2. 9撮影 ホテルメトロポリタン山形 2023. 1. 25撮影



山形まるごと館・紅の蔵 2020. 2. 9撮影



山形まるごと館・紅の蔵 2020. 2. 26撮影



山形まるごと館・紅の蔵 2021.1.27撮影



山形まるごと館・紅の蔵「さくらメニュー」2023.1.25撮影

写真6 山形市内の啓翁桜のフラワーデザインと桜に関連するメニュー

案内所、上山城など)、長井市は3か所(道の駅川のみなと長井、小桜館など)となっている。また、南陽市は11か所(JR赤湯駅、熊野大社など)、高島町は4か所(高島町太陽館、高島ワイナリー、道の駅たかはたなど)、川西町は4か所(かわにし森のマルシェ、JR羽前小松駅など)となっている。さらに、小国町は3か所(道の駅白い森おぐに、JR小国駅など)、白鷹町は5か所(道の駅白鷹ヤナ公園あゆ茶屋、山形鉄道フラワー長井線荒砥駅など)、飯豊町は10か所(道の駅いいで・めざみの里観光物産館、どんでん平スノーパーク、飯豊町観光協会など)となっている。

この他、1月上旬～2月中旬には宮城県2か所(JR仙台駅、JR東北本部)、福島県2か所(JR福島駅、JR郡山駅)、栃木県1か所(JR宇都宮駅)、埼玉県1か所(JR大宮駅)、東京都4か所(JR品川駅、駅たびコンシェルジュ新宿、駅たびコンシェルジュ池袋、駅たびコンシェルジュ上野)、新潟県1か所(JR新潟駅)でも啓翁桜のフラワーデザインの展示を行っている。

写真7は2019年度の「やまがた冬のあった回廊キャンペーン」の開催時、2020年2月26日にJR赤湯駅、JR高島駅、高島町太陽館の啓翁桜のフラワーデザインを撮影したものである。



JR赤湯駅 2020. 2. 26撮影



JR高畠駅 2020. 2. 26撮影



高畠町太陽館 2020. 2. 26撮影

写真7 南陽市内と高畠町内の啓翁桜のフラワーデザイン

4. かみのやま桜フェス

「かみのやま桜フェス」は、2013年の第1回より毎年3月上旬に山形県内の花き花木生産者、花屋、フラワーアーティストからなる「花集団 floRe: (ふらり)」が上山市産の啓翁桜を宣伝するために企画し開催している。

山形新聞の記事(2023.3.6)、「かみのやま桜フェス2023」のパンフレットによると、「第9回かみのやま桜フェス」は2023年3月5日に上山市中心部にある武家屋敷(三輪家、旧曾我部家)、長屋門ギャラリーを会場として10:00~15:00まで開催された。イベント内容は、上山市産の啓翁桜と山形県産のユリやデルフィニウムなどを組み合わせたフラワーデザインの展示、桜のワークショップ「啓翁桜を使った春の花束作り」、パステルアートやキャンドル作りなどのワークショップ、出店による販売である。主な出店は生花、アクセサリー、子ども服、弁当、中華そば、お好み焼き、温泉たまご、ドーナツ、マフィン、和菓子、コーヒー、ドリンクの飲食や雑貨の販売である。

啓翁桜のフラワーデザインは、上山市中心部にある武家屋敷(三輪家、旧曾我部家)、武家屋敷前道路、旧明新館跡、月岡ホテル従業員駐車場で展示を行っている。

5. 東京五輪で村山市産啓翁桜を咲かそう実行委員会

「東京五輪で村山市産啓翁桜を咲かそう実行委員会」は、2017年2月に利雪の取り組みや雪室施設の貯蔵技術を研究するNPO法人袖崎雪室研究会^{▼8}、啓翁桜生産者、JAみちのく村山村山営農センター花木生産部、山形県、村山市の関係者などの14名で結成した(河北新報2017.7.25)。この会では「日本の象徴である桜で真夏の五輪のおもてなしをしよう」と2017年2月より実証試験を行っている(朝日新聞2021.3.2)。

栽培方法は、河北新報の記事(2017.7.25)、朝日新聞の記事(2020.7.23)によると、2月に枝切りした啓翁桜を数十本ずつ束ねて紙で包み直径約30cm、長さ2.6m~4.0mの塩化ビニー

ルパイプに入れて雪室で貯蔵し、7月に雪室から出して蛍光灯とブラックライトを当てて開花させる抑制栽培である。雪室から出した後は促成栽培に切り替えて開花を日単位で調整することができる。この雪室は2003年10月16日に村山市土生田に建設した「JAみちのく村山零温雪室倉庫」を利用する。

朝日新聞の記事(2020.7.23)によると、2020年東京五輪・パラリンピックでは、開会式の会場などに啓翁桜を展示する予定であったが、東京五輪・パラリンピックはコロナウィルス感染症の拡大により延期となった。そこで、2020年7月22日には山形県村山市のJR村山駅2階の自由通路に設置した冷蔵ショーケースとその周囲に長さ約1.5mの35本の啓翁桜の展示が行われた。冷蔵ショーケースの啓翁桜の見頃は約1週間となるが、冷蔵ショーケースに入れていない啓翁桜の見頃は約3日である。

朝日新聞の記事(2021.3.2)によると、5年目の取り組みになる2021年度は3月1日に約800本の枝切りした啓翁桜を雪室に入れた。雪室からの取り出しは6月以降に順次行われる。山形新聞の記事(2021.6.14)によると、2021年6月14日には第1回目として80本の取り出しが行われ、2020年東京五輪・パラリンピックの会場には7月23日の開会式に合わせて出荷する。開会式の会場などには約400本の啓翁桜の展示が行われた。

6. おいしい山形推進機構

おいしい山形推進機構のWebサイトによると、おいしい山形推進機構は山形県、JAグループ、山形県米穀集荷協同組合などからなる組織であり、山形県知事を会長として山形県産の農林水産物の評価向上と消費拡大に向けた事業を展開している^{▼9}。啓翁桜については、12月下旬~2月中旬に「おいしい山形推進機構啓翁桜展示PR事業」として山形県内外で啓翁桜のフラワーデザインの展示を行っている。

おいしい山形推進機構の「県内外の啓翁桜展示場所、イベント開催状況(2022年12月下旬~2023年2月中旬)」資料によると、展示場所は、

山形県は9か所（おいしい山形空港、おいしい庄内空港、JR山形駅、JR新庄駅、JR米沢駅、JR鶴岡駅、文翔館など）、宮城県は1か所（JR仙台駅）、埼玉県は1か所（パレスホテル大宮）となっている。また、東京都は22か所（東武ホテルレバント東京、東京ステーションホテル、ホテルメトロポリタン丸の内、ホテルメトロポリタンエドモント、歌舞伎座「木挽町広場」、歌舞伎座「花籠」、国立劇場、山形県東京事務所、伊勢半本店紅ミュージアム、ホテル雅叙園東京「百段階段」、新橋演舞場、第一ホテル両国、ホテル椿山荘東京など）、神奈川県3か所（ホテルメトロポリタン川崎、ホテルメトロポリタン鎌倉、横浜ベイシェラトンホテル&タワーズ）となっている。さらに、愛知県は4か所（栄中京文化センター、山形県名古屋事務所、うなぎ和食 しら河 浄心本店など）、大阪府は7か所（オールディーズシアター、パナソニックタワー、山形県大阪事務所、ホテルグランヴィア大阪など）、京都府は1か所（ウェスティン都ホテル京都）となっている。このように、主な展示場所は各地の鉄道駅、空港、観光施設、ホテル、飲食店が多い。

写真8はJR山形駅（2021.1.27、2023.1.25）、霞城セントラル（2017.2.17）、文翔館（2017.3.1）、JR仙台駅（2023.1.6）で撮影した啓翁桜のフラワーデザインである。

IV. おわりに

本研究は、山形県における啓翁桜産地の生産流通構造について明らかにすることが目的であるが、本稿ではJAみちのく村山を例に取り上げて文献や資料、インターネットでの検索や住宅地図および生産者からの紹介による生産者名や所在地の把握、JAや生産者への聞き取り調査で得られた内容により検討を行った。また、山形県の啓翁桜産地では産地振興のために山形県啓翁桜品評会や各種キャンペーン、事業を行っている。本稿ではその内容についても検討を行った。

JAみちのく村山における啓翁桜の栽培は、

尾花沢市が1993年に始まった。村山市では聞き取り調査の中で明らかにすることができなかった。啓翁桜の栽培は生産者がそれぞれに始めたため、先駆者などによる栽培の呼びかけはみられない。

2018年度の生産者数は16戸（村山市12戸、尾花沢市4戸）である。樹園地は、村山市では横山（たもやま）、袖崎（そでさき）、土生田（とちうだ）、河島乙（かわしまおつ）、名取（なとり）などに点在している。また、尾花沢市では正厳（しょうごん）、丹生（にゅう）、名木沢（なきさわ）、毒沢（どくさわ）などに点在している。村山市では主に標高約100m～約150mにある畑、転作田、耕作放棄地を利用している。また、尾花沢市では主に標高約100m～約250mにある畑を利用している。総作付面積は2018年度が約10.3ha（村山市約5.0ha、尾花沢市約5.3ha）となっている。

集出荷を行う作業室を併設した促成室は、JAみちのく村山村山営農センター花木生産部では共同で利用する花木促成ハウスを整備している。促成室では、切り枝（粗枝）の調整と結束、休眠打破処理、促成室での促成管理を12月上旬～3月中旬まで行い、選別と箱詰めを含む出荷は12月下旬～3月下旬まで行う。促成室での作業は、火、木、日曜日の9:00～11:00までJAみちのく村山村山営農センター花木生産部の担当者1名を含む職員2～3名と雇用しているJAみちのく村山村山営農センター花木生産部の会員3名で行っている。選別の長さと同等級は、長さが70cm、80cm、100cm、120cm、140cmの5つあり、等級はそれぞれの長さに秀、優、無がある。

一方、尾花沢市の各生産者は、自己管理の下、休眠打破処理、促成室での促成管理、選別と箱詰めを含む出荷、集出荷場への商品の搬入までの作業を行う。選別の長さと同等級は、長さが70cm、90cm、125cm、145cmの4つあり、等級はそれぞれの長さに秀、優、無（等級が「無」の場合は「○」（まる）で示す）がある。集出荷場はJAみちのく村山尾花沢営農センター中の段集荷場となる。集出荷場には12月下旬～2



JR山形駅 2021. 1. 27撮影



JR山形駅 2023. 1. 25撮影



霞城セントラル 2017. 2. 17撮影



文翔館 2017. 3. 1撮影



JR仙台駅 2023. 1. 6撮影

写真8 山形市内と仙台市内の啓翁桜のフラワーデザイン

月下旬の火、木、日曜日の9:00~11:00までに搬入する。集出荷場ではJAみちのく村山尾花沢営農センター花木生産部の担当者が長さ、等級、出荷量を確認して出荷する。

JAみちのく村山の主要な市場は、東京や大阪の大都市、JA全農山形のギフトである。2017年度の出荷量は約10万8千本（村山市約7万9千本、尾花沢市約2万9千本）、同じく出荷額は約4,800万円（村山市約1,000万円、尾花沢市約3,800万円）となっている。

村山市の生産者への栽培技術の支援は、JAみちのく村山村山営農センター花木生産部と山形県村山総合支庁産業経済部北村山農業技術普及課との共同で行っている。4月には栽培技術講習会、11月下旬には目揃え会を実施している。一方、尾花沢市の生産者への啓翁桜の栽培技術の支援は、JAみちのく村山尾花沢営農センター花木生産部と山形県村山総合支庁産業経済部北村山農業技術普及課の共同で行っている。11月中旬には栽培技術講習会、11月下旬と1月上旬には目揃会、2月下旬~3月上旬には検討会を実施している。

生産者合計は28（男19、女9）人で、その生産者は20歳代~80歳代までいるが、とくに50~59歳は7（男4、女3）人と60~69歳は7（男5、女2）人ずつと多い。産地全体の生産者平均年齢は58.1（男58.1、女58.1）歳である。JAみちのく村山では、生産者の高齢化は進んでいるものの、20歳代~50歳代の生産者は合わせて半数にあたる14人がいるため、後継者は着実に育成されている。1戸あたりの生産者数は1~5人であり、2~5人の場合は夫婦や親子による経営である。また、後継者がいる、もしくは親がリタイアし、子のみで栽培を行っているのは8戸である。

栽培開始年は、1989年以降、0戸の年もあるが、1988年は4戸と最多であった。続いて、2003年は2戸、1989年、1990年、1993年、2008年、2013年、2014年は1戸ずつとなっている。

生産者は啓翁桜と他の農作物や林産物、育苗を組み合わせた経営を行っている。全体的には果樹を栽培している生産者は10戸と多く、米を

栽培している生産者は8戸、特用林産物を栽培している生産者は3戸、育苗の生産者は2戸と続いている。果樹ではスイカ、サクランボ、リンゴ、モモ、メロンの中から1~2つ、特用林産物ではタラの芽、ウルイ、フキノトウの中から1~3つを栽培している。育苗の生産はスイカの苗となっている。

出荷先は、①JAみちのく村山に100%出荷している生産者（11戸）と、②JAみちのく村山への出荷と個人で販売する直売の両方を行っている生産者（1戸）の2つがある。JAみちのく村山の管轄地域では、出荷先の組み合わせ型は2つあるが、JAみちのく村山には2つのタイプともにすべての生産者が出荷している。例年の平均出荷量は約2,000本~約20,000本までであるが、この中で生産者数が一番多いのは約5,000本の3戸である。JAみちのく村山の生産者の出荷量は少ない。また、JAみちのく村山の中で出荷量が多い生産者は作付面積も大きい傾向にある。例えば、出荷量が約2,000本~約5,000本の生産者は作付面積が約0.2ha~約0.4ha、同じく約6,000本~約8,000本の生産者は作付面積が約0.5ha~約1.0ha、同じく約10,000本~約20,000本の生産者は作付面積が約1.2ha~約1.5haとなっている。

各生産者からみたJAみちのく村山の啓翁桜産地の抱える主な問題点は、天候不順による出荷量の減少、生産者の高齢化と後継者の不足、生産者による品質のばらつき、手入れや作業が難しい、啓翁桜と他の農産物の栽培が重複することである。

山形県の啓翁桜産地では、産地振興のために山形県啓翁桜品評会や各地で「さくら咲くやまがた冬のさくらキャンペーン」、「やまがた冬のあった回廊キャンペーン」、「かみのやま桜フェス」、「おいしい山形推進機構啓翁桜展示PR事業」などが行われている。山形県啓翁桜品評会は多くの生産者が出品し賞を競うだけでなく、栽培技術の習得、情報交換、講習会や講演会などの講師依頼と利活用している。各種キャンペーンや事業では、期間中に山形県、宮城県、福島県、栃木県、埼玉県、東京都、神奈川県、

新潟県、愛知県、大阪府、京都府にある各地の鉄道駅、空港、観光施設、ホテルなどで啓翁桜のフラワーデザインを展示している。各種キャンペーンや事業は、一大産地である山形県の啓翁桜産地の大きな宣伝になっていると考える。啓翁桜のフラワーデザインの前では鑑賞している人、写真を撮影している人、啓翁桜の簡単な説明パネルを読んでいる人をよく見かける。山形県における啓翁桜産地の産地振興のためには山形県啓翁桜品評会、各種キャンペーンや事業を継続することが重要である。

謝辞

本研究の作成にあたっては、お忙しい中、聞き取り調査に協力していただいたJAみちのく村山の各生産者の皆様、JAみちのく村山の村山営農センター生産販売課および尾花沢営農センター生産販売課の啓翁桜担当の皆様にお大変お世話になりました。ここに記して心より感謝申し上げます。

参考文献・資料

- ・朝日新聞 (2020. 7. 23) : 「山形」東京五輪に啓翁桜を 夏場の開花技術磨く 村山」.
- ・朝日新聞 (2021. 3. 2) : 「今年こそ五輪に咲け、啓翁桜 村山市の雪室で貯蔵開始」.
- ・岩手日日新聞 (2020. 3. 10) : 「需要激減で農家は悲鳴 啓翁桜の出荷半値以下 花巻」.
- ・おいしい山形推進機構「県内外の啓翁桜展示場所、イベント開催状況 (2022年12月下旬～2023年2月中旬)」.
- ・河北新報 (2017. 7. 25) : 「東京五輪 啓翁桜で盛り上げる」.
- ・「かみのやま桜フェス2023」パンフレット.
- ・北日本新聞 (2023. 1. 6) : 『真冬に「春」出荷 南砺・福光、温泉水利用し「啓翁桜」』.
- ・広辞苑 (2018) : 品評. 岩波書店、第七版、2514.
- ・広辞苑 (2018) : 品評会. 岩波書店、第七版、2514.
- ・広辞苑 (2018) : フラワーデザイン. 岩波書店、第七版、2592.
- ・酒井宣昭・浜西駿輔 (2019) : 山形県における啓翁桜産地の生産流通構造— JA やまがたと JA さくらんぼひがしねの例—. 東北学院大学東北文化研究所紀要51、17-37.
- ・酒井宣昭・浜西駿輔 (2020) : 山形県における啓翁桜産地の生産流通構造—JA山形おきたまとJAてんどうの例—. 東北学院大学東北文化研究所紀要52、19-38.
- ・酒井宣昭・浜西駿輔 (2022) : 山形県における啓翁桜産地の生産流通構造—JAさがえ西村山とJA庄内みどりの例—. 東北学院大学東北文化研究所紀要54、95-116.
- ・JAグループ山形Net (2016. 1. 28) : 「ひと足早い春をお届け」.
- ・上毛新聞 (2021. 2. 14) : 「全国へ春届け 啓翁桜やレンギョウ出荷 中之条」.
- ・「第14回冬のさくらキャンペーン2023」パンフレット.
- ・中日新聞 (2021. 2. 2) : 「早咲き啓翁桜 人気満開 南砺の生産者 出荷追いつかず」.
- ・中日新聞 (2021. 2. 4) : 「雪の中 春見～つけた 大野の啓翁桜出荷」.
- ・中日新聞 (2021. 2. 10) : 「淡いピンク、小さな春 大桑村役場に啓翁桜を展示」.
- ・中日新聞 (2021. 2. 20) : 「『啓翁桜』念願の初出荷へ JA木曾など、大桑の施設で選別作業」.
- ・中日新聞 (2022. 2. 12) : 『雪深い山里で「啓翁桜」出荷最盛期 大野』.
- ・中日新聞 (2023. 2. 17) : 「啓翁桜冬を彩る 大野で出荷最盛期」.
- ・日本大辞典刊行会編 (2001) : 品評会. 日本国語大辞典11 第二版、小学館、651.
- ・日本大辞典刊行会編 (2001) : フラワーデザイン. 日本国語大辞典11 第二版、小学館、1042.
- ・やまがたアグリネット (2007. 1. 9) : 「啓翁桜の出荷が始まる」.
- ・山形新聞 (2021. 6. 14) : 「村山で啓翁桜掘り出し 東京五輪・パラなどで展示へ」.
- ・山形新聞 (2023. 3. 6) : 「啓翁桜やユリ、華やか春の道 かみのやま桜フェス」.

注

- ▼1 五條市観光協会 (<https://www.gojo.ne.jp/g-anko/index.htm>) の Facebook (<https://www.facebook.com/gojokanko>) には、2023年3月20日に同日に撮影した啓翁桜の写真付きの投稿がある。また、2023年3月24日には2023年3月22日に撮影した啓翁桜の写真付きの投稿がある。
- ▼2 各JAの啓翁桜の担当者もしくはインターネットでの検索でヒットした生産者には、①JAの管轄地域に啓翁桜の生産者がいるかどうか、②生産者数が2戸以上であるかどうかについて聞き取り調査を行った。本稿で取り上げるJAみちのく村山では2017年12月19日に上述①、②の確認を行った。なお、他の6つのJAでの確認日は酒井・浜西(2019、2020、2022)にそれぞれ記述したため、ここでは省略する。
- ▼3 JAみちのく村山本所および「花木促成ハウス」の所在地は、村山市楯岡北町1-1-1である。花木促成ハウスは、夏は使用していない。
- ▼4 JAみちのく村山尾花沢営農センター中の段集荷場の所在地は、尾花沢市新町5-7である。
- ▼5 2017年12月26日に行ったJAみちのく村山村山営農センター花木生産部への聞き取り調査によると、JAみちのく村山村山営農センター花木生産部は、調査時点の約20年前に促成室の共同利用と栽培技術の向上を目的に結成したが、正確な年は不明である。
- ▼6 JA全農やまがたのWebサイトは<https://www.zennoh-yamagata.or.jp/>である。最終検索は2023年9月27日。
- ▼7 「やまがた冬のあった回廊キャンペーン」のWebサイトは<https://attakairou.oki-tama.jp/>である。最終検索は2023年9月27日。
- ▼8 NPO法人袖崎雪室研究会は1992年に結成した。
- ▼9 おいしい山形推進機構のWebサイトは<https://www.yamagata.nmai.org/>である。おいしい山形推進機構事務局は山形県農林水産部農政企画課内(山形市松波2-8-1)にある。最終検索は2023年9月27日。